

## 謝辞

本稿の著者の一人である福島は、2008年10月に開催された第6回国際平和博物館会議（The Sixth International Conference of Museums for Peace）にあたり、準備作業への協力を要請された。筆者は、会議の成功のための努力と並行して、この機会に平和博物館研究のための基礎情報を収集したいと考え、準備過程で提案して概ね好意的な反応を得た。その提案自体はおおむね好意的に受け取っていただけたと思うのだが、問題意識を共有する数名の研究者とともに文献の調査・収集に取り組んだ。本稿は、国際会議準備過程で収集された文献に、会議後に追加収集された文献を加え、福島と岩間がまとめたものである。

本稿の執筆にあたりご協力頂いた多くの方々に謝意を表したい。同会議プログラム委員会の藤岡惇、桂良太郎、村上登司文らの方々との意見交換は本作業開始の契機となり、調査の方向性についても少なからぬ示唆を受けた。また、安斎育郎・国際平和ミュージアム名誉館長（国際会議組織委員長）には当初から励ましを頂き、調査過程では、高杉巴彦館長をはじめとする立命館大学国際平和ミュージアム（とくに国際メディア資料室）のスタッフの方々の協力を得た。さらに、平和博物館の研究に関する文献情報の面では山辺昌彦氏（東京大空襲・戦災資料センター）ら多くの方々に情報提供を頂くとともに、日本平和学会「平和と芸術」分科会や京都の平和博物館研究会では報告の機会を得て、貴重な意見を頂いた。

本稿の最終稿準備過程でも新たな文献が発行されており、可能な限りそれらを組み込む努力を払ったが、平和博物館に関連する研究はまさに現在進行形でなされており、本稿が収録し得た情報は2009年10月現在のものである。おそらくは筆者らが見落とした文献もあるに相違なく、本調査が万全とは言い難いと認識しているが、筆者らは、本稿が平和博物館研究の発展にとっての手がかりの一つとなることを期待するものである。

最後に、立命館大学国際平和ミュージアムが紀要別冊の形で成果の発表の機会を与えて頂いたことに対し、心より感謝したい。